



市民ネットワーク鶴ヶ島は
大野ひろ子を市議会に送っています

3月議会報告 2012.4

発行 / 市民ネットワーク鶴ヶ島

鶴ヶ島市富士見2-12-15

Fax 049-271-5116

<http://www.h-ohno.com/>



地元の商店街が消えることで、
手に入る食べ物の個人差が広がっています。

広がるフードデザート

近年、日本の高齢者の間で低栄養問題が深刻化しています。低栄養状態におちいると、肺炎などのリスクが高まるだけでなく、老化が早まり、生活自立度の低下や要介護度の上昇を誘引することがわかってきました。その大きな要因としてフード（食べ物）デザート（砂漠）の問題があげられます。

わずか数十年の間に私たちの日常は車に頼る生活に様変わりしています。郊外型のショッピングセンターの普及とともに、歩いていける範囲の商店街をシャッター通りへと変貌させてしまいました。

フードデザートは買いたい物が不便な過疎地の高齢者の問題だと捉えられがちですが、赤ちゃんや幼児を抱える子育てママ、車の運転のできない人、また、高齢で運転をやめる人も増えていく昨今、実は都市圏で暮らす人にも深刻な問題となっています。

そして、こうした日々の買い物物の不便さだけがフードデザートの問題ではありません。野菜や果物、魚肉類などの栄養価の高い生鮮食品が買えず、結果的に栄養不足や偏りから起きる健康被害が蔓延していくことにあります。

都内の高島平団地では、周囲に生鮮食料品店が多いにもかかわらず、周囲から孤立して引きこもっている高齢者は栄養事情が悪化していることがわかってきました。一人で暮らしていると、ついお惣菜一品を買って食事をすませたりする方も多いのではないのでしょうか。一方近くにお店がなくても、ご近所のお付き合いがあるところでは、高齢者は全体的に元気で健康管理にも積極的であるようです。人は食べることに意欲を失うと、近くにお店があっても足を運ばなくなりやすくなります。一緒に食事をしたり、おしゃべりする相手がいることが大事であることに改めて気づかされます。

急激に高齢化の進んでいる地域もある鶴ヶ島。将来を見越して、買い物弱者・買い物難民問題対策として、商店街の維持や生協の宅配サービス・地場野菜の移動販売の促進、また公共交通手段の確保などが必要となっています。

生活クラブ生協ではほぼ全品目の放射能測定を継続しています。また、4月からは更に基準値を低く設定しています。